

ラス他ニ取調ヲ可キコトアルニ非スシテ徒ラ  
ニ年月ヲ経過スルモ如何トモスル能ハス大  
ニ人民ノ私權ニ関シ其弊ヤ言フニ忍ビサ  
ル者アラシ抑モ治罪法第三百六條後項  
ニ於テ私訴ニ付キ取調未タ充分ナラサ  
ルハ公<sup>辯</sup>ノ裁判アリタル後其裁判言  
渡ヲ為スコトヲ得トアリテ其裁判期限ノ  
制裁ナルヲ以テ往々私訴淹滞ノ勢アリテ  
聞ク今第三百八條中公訴ノ裁判ト同時  
異時ノ明文ナシト虽十分ニシテ迅速ナ  
ルハ裁判ノ原則ナルヤニ付他ノ取調ヲ可  
キ條件ナキ時ハ必ス公訴ノ裁判ト同時ニ  
還付ヲ言渡ス可キ者ト心得可然哉

右ハ左ノ通

指令

同ノ通

三重縣

十四年十二月廿七日付  
十五年一月十三日付

治罪法第三百九条ニ本案ノ裁判言渡

ニ對スル上訴ノ期附内又上訴アリタル

ハ其判決アルマテ裁判執行ヲ停止

スル之レアリ而シテ其裁判言渡ヲ受

ケタル者ヲ止訴ノ期附内又ハ止訴アリ

タル時ハ其判決アルマテノ間獄舎ニ勾置

スル等ノ明文之レ無シ右ニ其裁判言

渡ヲ受ケタル者公判以前勾留又ハ収

監若クハ責付トナリタル者ナル時ハ裁

判停止中何レノ場合ニ差置クヘキ筋

ニ候哉

右審按スルニ治罪法第三百九条ノ

第三百九条 本案

ノ裁判言渡ニ對

スル上訴ノ期限

内又上訴アリタ

ル時ハ其<sup>判</sup>決アル

マテ裁判執行ヲ

停止ス

場合ニ於テ裁判言渡ヲ受タル者  
公判前句留若クハ收監セラレタル  
者ナルハ止訴ノ期限内又ハ上訴  
アリタル時其判決アルマテ其裁判  
執行停止中ハ仍ホ監倉ニ拘禁ス  
一ク若シ責付セラレタル中ハ治罪法  
第百六十四條第二項被告人禁  
錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ當  
然保釈責付ヲ取消シタル者トス  
トアルニ依リ亦仍ホ監倉ニ差置  
ク一キ義ト考量ス因テ左ノ通御  
指令相成可然哉

指令

伺之趣句留又ハ收監セラレタル者ハ  
其終監倉ニ留置キ責付セラレタ  
ル者モ禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル  
中ハ亦監倉ニ留置リ義ハ心得ヘシ

仙臺裁判所判事

十三年十二月十日請訓  
十四年七月廿三日内訓

第三百十條 禁錮

三十一日 第三百十條逃亡シタル者ト有

以上ノ刑ノ言渡ヲ受

ルハ欠席ト對審トヲ包含セルモノカ或ハ

ケタル者逃亡シタル

對審裁判ヲ受ケタル者ノミヲ指示シタ

時ハ現ニ捕ニ就ク

ルモノカ前各条現ニ捕ニ就クニ非レハ云々ト有

ニ非サレハ上訴ヲ

ルハ後ノ各条ニ定メタル上訴ノ期限内捕

為ストヲ得ス

ニ就キタルニ非レハ上訴スルヲ得サルモ

ノカ或ハ刑ノ期滿免除ニ至ル迄何時ニ

テモ捕ニ就キタルトキハ上訴スルヲ得ヘ

キノ謂ヒカ

右ハ兩席ト對審トヲ含蓄ス對審

ノモノハ上訴期限内ニ就捕スルニアラ

サレハ上訴ノ權ヲ失フヘシ欠席裁判ヲ

受ケタル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ラサレハ  
第三百五十六條ニ依リ上訴スルヲ得ベ  
シ

内訓

第三十一條 對審ト欠席トテ合當ス  
對審ノ者ハ上訴期限内就捕スルニアラサ  
レハ上訴ノ權ヲ失フヘシ欠席裁判ヲ受  
クル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ラサレハ第三  
百五十六條ニ依リ上訴スルヲ得ベシ

第三百十一條 勾留  
ヲ受ケタル者上訴  
爲シ又ハ保釋ヲ求  
ムル時ハ其申立書  
ヲ監獄長ニ差出シ  
監獄長ヨリ之ヲ其  
裁判所ノ書記ニ  
差出ス可シ

仙臺裁判所判事

十三年十二月十日請訓  
十四年七月廿三日内訓

第三百十二条 訴訟開

三十二日 第三百十二条の場合に於て係人又は其代人非常ノ

ハ檢察官ト雖モ非常ノ変災ニ罹ルト無變災厄難ニ因リ上訴期

シトセス然ラハ該条訴訟關係人中ニハ檢限ヲ經過シタル場合ニ

察官モ包含スルモノカ或ハ當ニ訴訟關係於テ其旨ヲ証明シタル

人トシ有シハ檢察官非常ノ變災ニ罹ルト時ハ期限ヲ經過シタル

雖モ上訴ノ權利ヲ回復スルヲ得サルモノカニ因リ失ヒタル權利ヲ

右ハ檢察官モ含蓋スルナリ  
回復スルヲ得但變災

内訓

第三百十二条 檢察官モ訴訟關係人ト  
厄難ヲ免カレタルヨリ

ルニ付上訴ノ期限ヲ經過シタルニ因リ失  
通常ノ期限内ニ其証拠

ヒタル權利ヲ回復スルヲ得ベシ  
ヲ申立昏ニ添へ上訴ヲ  
為ス可シ

第三百十三條 書記ハ  
速ニ前條ノ申立書ヲ對  
手人ニ送達ス可シ對手  
人ハ三日内ニ答弁書ヲ  
差出スルヲ得  
上訴ヲ判決ス可キ裁判  
所ニ於テハ會議局ニテ  
檢察官ノ意見ヲ聽キ先  
ツ其上訴ヲ受理ス可キ  
ヤ否ヲ判決ス可シ  
上訴ヲ受理ス可キ者ト  
判決シタル時ハ書記ヲ  
シテ其旨ヲ訴訟關係人

ニ通知セシメ通信ノ規  
則ニ從ヒ本案ノ裁判ヲ  
為ス可シ

上訴ヲ受理ス可カラザ  
ル者ト判決シタル時ハ  
他ノ原由アルニ非カレ  
ハ即時ニ裁判執行ヲ為  
サシム可シ

滋賀縣 十四年十一月廿一日 質問  
同 年十二月六日 回答  
第七條 治罪法第三百十四條ノ趣意  
ハ辨論ヲ終ヘタル中ハ必ス其日カ又ハ次  
日ニ裁判言渡ヲナス可キモノカ  
右ハ左ノ通

回答

第七條 辨論ヲ終リタル後成ル可ク  
即時ニ為スヘキモノト考量ス

第三百十四條 裁判言  
渡ハ弁論ヲ終リタル後  
公庭ニ於テ即時ニ之ヲ  
為シ又ハ次日ニ之ヲ為  
ス可シ

裁判言渡書ハ其言渡前  
裁判官之ヲ作り各記ト  
共ニ署名捺印ス可シ  
裁判言渡書ニハ其言渡  
ヲ為シタル裁判所年月  
日其事件ニ干預シタル  
檢察官ノ氏名ヲ記載ス  
可シ



若松始審裁判所長判事

十四年二月請訓  
十四年十二月十四日內訓

第三百十五條 訴訟開

第二條 治罪法第三百十五條ニ訴訟開

係人ハ其費用ヲ以テ裁

係人ハ其費用ヲ以テ裁判言渡書ノ謄本又ハ其

判言渡書ノ謄本又ハ其

又ハ其抜唇ヲ求ムルヲ得云々ト之アリ其

抜唇ヲ求ムルヲ得但

細則ハ不日御達ニ相成ルヘキ義トハ存

上訴ノ為ノ其求ヲ為シ

ニ候ハ共若シ適宜取計フヘキ義ニ

タル時ハ書記ヨリ二十

候ハ其費用ハ筆墨紙代價ヲ以テ

四時内ニ之ヲ下付ス可

計算シ之ヲ細メシメ可然哉將夕壹

シ

枚若干錢トシ其枚數ニ應シテ納メシ

甲第七號明治十四年  
十二月二日

ムヘキ哉

治罪法第三百十五條裁

右審按スルニ第二條第一項第二項

判言渡ノ謄本又ハ其枚

本年當省甲第七号布達ニ依ルモ

唇ヲ求ムル者ハ其用紙

ノト考量ス依テ凡ノ通御内訓相

一枚金三錢ノ費用ヲ上

成可然哉

内訓

第二條第一項第二項ハ本年當省甲  
第七号布達ノ通心得ヘシ

納ル儀ト可心得此旨  
相達候事  
丁第三十一號  
明治十四  
年十二月  
十五日

第三項 檢察官ノ請求ニ依リ欠席裁  
判言渡各ノ謄本ヲ被告人ニ送達スル  
場合ニ於テハ其費用ハ其送達ヲ受ク  
ヘキ被告人ヨリ相拂ハシムヘキ哉將夕裁  
判所ニテ擔當スベキ哉

本年本甲第七号布達裁  
判言渡ノ謄本又ハ被告  
ヲ求ル者代價ノ儀無  
シカハ其者ニ限リ無代價  
ニテ下渡スモ不苦儀ト  
可心得此旨相達候事

右審按スルニ第三項 本年當省丁  
第廿六号達使丁規則第十一條ニ依  
ルモノト考量ス依テ尤ノ通り御内  
訓相成可然哉

丙第十二號  
明治十五年  
三月二十七日  
裁判所

二五十五

内訓

第三項 本年當省丁第廿六号達使  
丁規則第十一條ノ通心得ヘシ

警視廳  
府縣  
東京府  
明治十四年十二月  
當省

第四項 右言渡各ヲ訴訟關係人ニ  
於テ自ラ謄寫若クハ抜各セシテヲ請求  
スルキハ其要ル所ノケ所ノミヲ採取リ又  
ハ其他ノケ所ヲ糊封シテ貸與ヘ之ヲ謄  
寫若クハ抜各セシムルモ敢テ差支之ナ  
キ哉

甲第七號布達裁判  
言渡ノ謄本又ハ其抜  
書ヲ下付スル費用ニ當  
分違敬言罪ニ限リ徴  
收セサル様取計ヘシ  
此旨相達候事

右審按スルニ第四項 訴訟各類ハ  
總テ登記之ヲ保存シ其紛失及ニ毀  
損ヲ防カサル可カラス故ニ訴訟關係  
人ニ於テ自ラ言渡各ノ謄寫若クハ

丁第九號  
明治十五年  
丁第十號  
明治十四年  
甲第七號布  
達裁判言渡ノ謄  
本ヲ求ル者上納

抜昏ヲ為サンコシテ請求スルモ其正本  
ヲ貸渡スコトヲ得サル

金并ニ全年丁第  
二十六號使丁規則  
第十五條ノ違約  
金徴収ノ上ニ雜収  
入ニ組入月々本省  
ハ納附候義ト可  
心得此旨相達候  
事

姫路始審裁判所長判事

十四年十二月二日  
全年十二月廿日  
内訓

第三条訴訟關係人裁判所渡昏ノ騰

本ヲ請ヒ之ヲ下付スル用紙及ヒ代價ハ

如何

内訓

第三条 本年当省甲第七号達ノ

通り

仙臺裁判所判事

十三年十二月十日請訓  
十四年七月廿三日内訓

三十三：曰 第三百十六條ノ末項ニ通

常ノ規則ニ從フト有ルハ更ニ通常規則ニ

定メタル上訴期限ヲ告知スルノ謂歟或

ハ對審ニ於テハ之レヲ告知シテ、席ニ於

テハ之レヲ記載スルノ規則ニ從フトヲ指示

シタルモノ歟

右ハ通常ノ規則トアルハ上訴期限ニ付

キ定メタル規則ナリ

第三十三條 通常ノ規則トハ上訴期限

ヲ定メタル規則ヲ云フ

第三百十六條 對審裁

判ニ因リ刑ノ言渡アリ

タル時ハ裁判長ヨリ其

言渡ヲ受ケタル者ニ前

条ノ請求及ヒ其言渡ニ

對シ控訴又ハ上告ヲ為

スヲ得可キ一及ヒ其期

限ヲ告知シ又副席裁判

ニ因リ刑ノ言渡アリタ

ル時ハ其言渡ニ對シ故

障ヲ為スヲ得可キ一及

ヒ其期限ヲ言渡各ニ記

載ス可シ

若し其告知又ハ記載ナ  
キ時ハ通常ノ規則ニ從  
ヒ其告知アルヲテ上訴  
期限ノ経過ヲ停止ス

第三百十七条 書記ハ

各事件ニ付キ各別ニ公  
判始末各々作リ左ノ條  
件其他一切ノ訴訟手續  
ヲ記載ス可シ

一 裁判ヲ公行シタルト  
又ハ傍聴ヲ禁ムルノ  
言渡アリタルト及ヒ  
其事由

二 被告人ノ訊問及ヒ其  
陳述

三 証人鑑定人ノ陳述及  
ヒ宣誓ヲ為シタルト

若し宣誓ヲ為サレ  
時ハ其事由

四原被ノ証拠物件

五弁論中異議ノ申立ア

リタルト後日ヲ期シ

テ申立ツ可キ事件ヲ

申立タルト是等ノ事

件ニ付キ檢察官其他

訴訟関係人ノ意見及

ニ裁判所ノ判決

六弁論ノ順序及ニ被告

人ヲシテ最終發言セ

シノタルト

熊谷始審裁判所判事

十五年四月十四日 伺  
全年全月廿七日 付

書記ハ公判始末書ヲ作ルヲ載セテ治罪

法第二百十七條ニ有之候處擔任ノ書記

未タ誤書ヲ整頓セサルノ前ニ於テ免職又

ハ死去致候時ノ如キハ復タ之ヲ作ルベキモ

ノナリ裁判上一箇緊要的ノ書類ヲ缺ク

ニ至ラン如此場合ニ於テハ前任ノ遺稿ニ

依リテ他ノ書記ノ調製スベキモノナルヤ

若シ遺稿等モ無之候時ハ如何心得可

申哉

右ハ遺稿等アルキハ之ニ依リ他ノ書記

ヲシテ調製セシメ若シ其依ルベキ者

ナキ時ハ他ノ書記ヲシテ公判判事  
檢察官ニ聞合セタル上調製セシメ其旨  
ヲ附記スルニ於テハ格別不都合ナカル  
ベシ尤其事繁雜ニ涉リ訊問數日ニ及  
フ等ニテ其顛末明了ナラサル場合ニ於  
テハ更ニ裁判ヲナスヨリ外ナカルヘシ  
ト虽右等ノ如キハ實際稀ナルトナレ  
ハ左ノ通

指令

伺ノ趣他ノ書記ヲシテ前任ノ遺稿ニ  
依リ若シ之レナキ時ハ公判々事檢察官  
ニ聞合ノ上調製セシメ其旨ヨリ書類ニ  
附記スル儀ト心得ベシ

若松始審裁判所 十四年十一月廿四日講訓  
今年十二月十三日内訓 第三百十八條 公判始

第二條 治罪法第三百十八條ニ公判始

末旨ニハ云々裁判長陪席判事檢察官

及ヒ各記ノ氏名ヲ記載スヘシト之アリ右

ハ裁判長陪席判事各記ノ氏名ハ其

始末各ノ紙尾ニ列記シ捺印スルモノト

被考候然ルニ檢察官ノ名前モ裁判可シ

官各記ト同シク紙尾ニ列記スルヲ示

サレタル儀ニ候哉又ハ何裁判所檢事

某ヨリ被告人何某ニ對シ云クト文言

中へ記入スヘキヲ示サレタル儀ニ候哉

右審案候各記ノ公判始末各ヲ作ルハ

第三百十七條以下ノ規則ニ從フ故ニ裁判

長陪席判事檢察官及ヒ昏記ノ氏名  
ハ總テ該始末昏中ニ記入スルハ第三百  
十八條ノ如シト虽モ陪席判事檢察官  
ノ氏名ハ紙尾ニ列記シ捺印スルニ及ハス  
第三百十九條ノ規則ニ依リ裁判長  
及ヒ昏記署名捺印スルノニナリトス  
因テ左ノ通

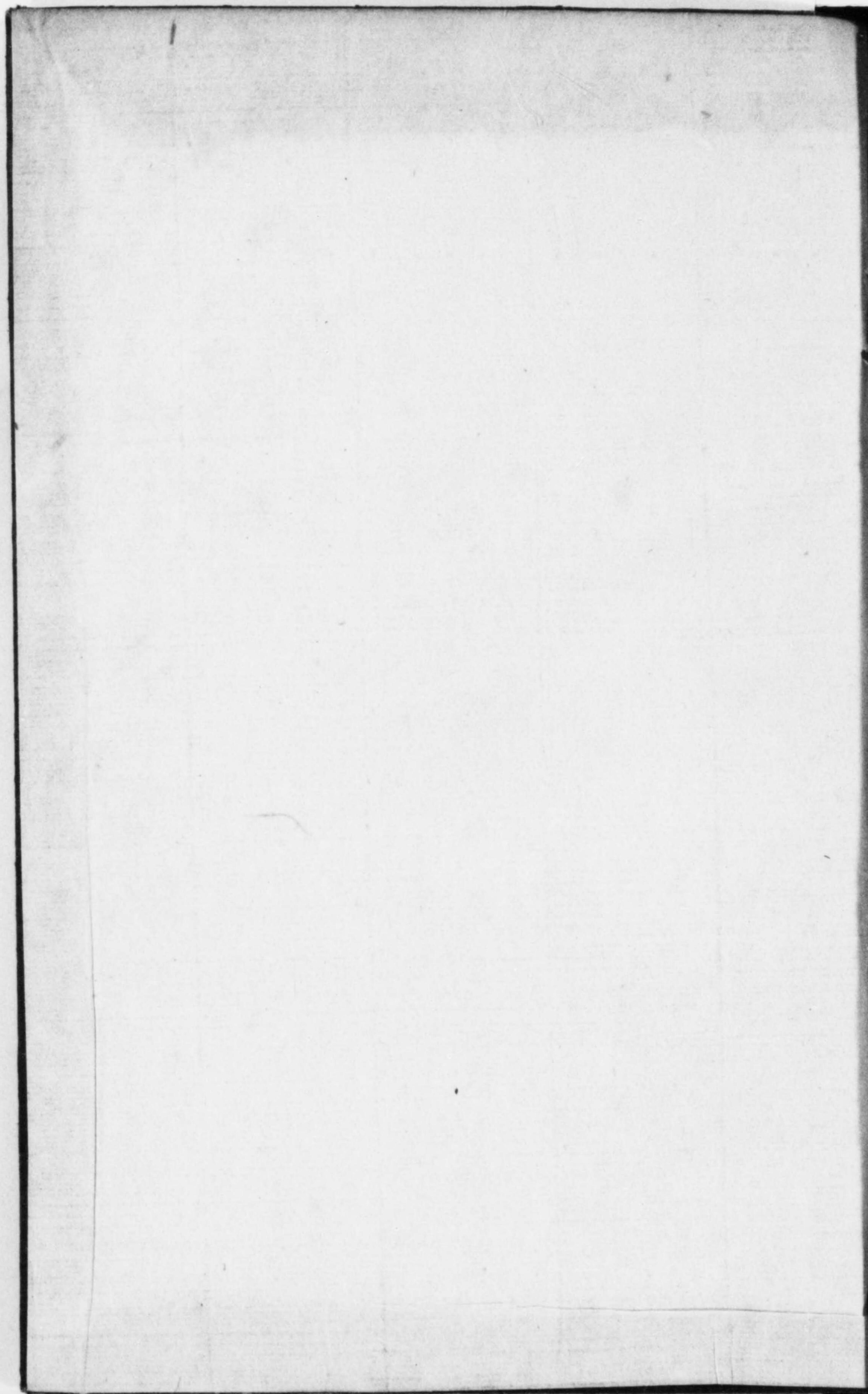
内訓

請訓之趣裁判長陪席判事檢察官及  
ヒ昏記ノ氏名ハ公判始末昏ノ紙尾ニ列記  
スルモ裁判長昏記ノニ署名捺印ス  
可シ

第三百十九條 公判始  
末昏ハ裁判言渡ヨリ三  
日以内之ヲ整頓シ裁判  
長及ヒ書記署名捺印ス  
可シ  
裁判長ハ署名捺印セザ  
ル以前ニ公判始末書ヲ  
檢閲シ若シ意見アル時  
ハ其紙尾ニ記載ス可シ



第三百二十条 裁判言  
渡唇及ヒ公判始末唇ノ  
正本ハ其裁判所ノ唇記  
局ニ保存ス可シ  
上訴アリタル時ハ裁判  
長及ヒ唇記裁判言渡唇  
及ヒ公判始末書ノ謄本  
ニ認印シ之ヲ上訴唇類  
ニ添フ可シ



A page from a book featuring a large rectangular table. The table is defined by a double-line border and contains 12 vertical columns and 2 horizontal rows. The columns are of varying widths, with the two outermost columns being the widest. The rows are also of varying heights, with the top row being taller than the bottom row. The table is currently empty of any text or data.


水  
記

